

IV 自己点検・評価委員会報告

当研究所の自己点検・評価委員は改選され、2001年の4月から本委員会は、その大半が新たなるメンバーで出発することになった。2001年度と2002年度の両年にわたって、当研究所の諸活動に関する自己点検・評価作業に当たるわけである。2004年度から独立行政法人に移行するため、いずれの国立大学でも各種の自己点検・評価作業が大きな課題となり、また将来の点検評価システムを構築する任務が課せられている。新委員会の発足に当たり、いくつかの目標を設定した。ひとつは2年間の任期中に当研究所の教官全員につき、近い将来に研究所そのものに対し、あるいは分野別に行われるはずの外部評価等の基礎資料となるべき各自の研究活動に関する自己点検報告書を作成することである。毎月、定例で開かれる本委員会で周到に審議を重ねたのちに、同報告書は2002年の7月を目途に作成される運びとなった。その内容は従来から行われてきたように研究業績をリストアップするにとどまらず、自らの研究活動の広報や社会的な還元、それぞれの学界学会での貢献、学術研究体制やネットワークづくりなど、研究活動を広く包括できるものとするようになった。それぞれの教官に網羅的な自己申告資料の作成を依頼し、それを交通整理したのち、最終的には教官全員の研究活動をデータベースのかたちでHP、およびCD-ROMで公表する予定である。この作業は目下のところ鋭意進行中である。この他に2001年度には、前委員会（林基治委員長）により作成された各分野、センタ

一、施設に対する外国人研究者による外部評価の報告書「External evaluation by foreign scholars of the research activities at the Primate Research Institute, Kyoto University between 1996-2000」のCD-ROM版を作成して、2001年度の年報に添付し、関係各局、関係研究機関、関係研究者等に配布した。さらに随時、研究所に届く国立大学の独立法人化問題に関連する諸資料やニュース類、大学評価・学位授与機構による評価資料、全国の研究機関による自己点検・評価報告書類等を定例の委員会で詳細に検討してきた。独立法人化問題に関しては、2001年の7月2日に、先に独立行政法人に移行した奈良国立博物館の副館長である杉長敬治氏を招いて、「国立博物館が独立行政法人になって」のテーマで所内講演会を開き、独立行政法人化の実態について所員の啓発に努めた。同じく2001年9月20日には大学入試センターの会計課長の澤田佳成氏を招いて、「大学入試センターにおける独立行政法人化の対応について」のテーマで講演会を開催し、ことに独立行政法人化に伴う会計的な側面での問題に対する啓発に努めた。

自己点検・評価委員会：小嶋祥三所長・鴨嶋武忠前事務
長（8月まで）・福井秀昭事務長（9月以降）・東利昭
庶務係長・浅岡一雄・片山一道・鈴木樹里・正高信男・
渡辺邦夫

（文責：片山一道）

V COEとしての活動

COE形成基礎研究費「類人猿の進化と人類の成立」

1. 13年度研究全般について

本研究課題を1) 社会・生態、2) 形態・古生物、3) 認知・脳科学、4) 分子・遺伝の4班構成で、最終年度に向けての準備も考慮して研究を進めた。

社会生態では、前年度に続いてウガンダ国カリンズの調査地としての整備を進めた。現地のスタッフの連日に及ぶ観察によりチンパンジーのいわゆる「人なれ」が急速に進み観察が容易となった。固体識別をベースとしたDNA分析のための糞や尿などの収集が急速に進み、最終年度における分析が期待される。他方35年を超える調査歴史をもつタンザニア国マハレではチンパンジーの文化的行動パターンの発達に焦点を当てた研究が進展した。例えば11歳のワカモノオスが「落ち葉かき」をした直後3

歳の弟が同じ行動を示したように、幼児期に年長者の行動を模倣する例が多く観察され、それらのいわば文化的行動の伝承が明かとなった。ゴリラの研究では、カメルーンとガボンで現地調査を行い、集団のサイズと構成についての試料を収集した。低地熱帯林に生息するゴリラでは平均集団サイズが10頭前後で、山地林のゴリラ集団に比べ若干小さいことが明となった。これは山地群が葉食傾向であるのに対し、低地では果実食で採食競合のあることによると考えた。またチンパンジーと同じく離合集散社会を持つクモザルについての調査を行い、大きいパーティーサイズ、小さい遊動域等、チンパンジーと比較し、その生態学的要因を考察した。

形態古生物では、研究所で誕生を見たテナガザル 2 頭、チンパンジー 3 頭の身体や運動機能の成長発達研究が進展している。例えばチンパンジー幼児の場合、二足歩行時に両上肢を高くあげたままの歩行、雑巾掛け型四足歩行が多く見られ、マカクではほとんど観察されない行動発達が観察されている。テナガザルの発達では、身体成長はニホンザル等マカクとほぼ等しいが、行動の発達はマカクより遅く、マカクとチンパンジーの間であることが明かとなっている。古生物研究では昨年度においてタイ北部の Chiang Muan 累層における東南アジアとしては初めての大型類人猿化石(歯)の発見に続き今年度もさらに歯の化石が発見された。同時に複数の哺乳類化石も発見され生物の多様性が明らかになると共に古地磁気測定による絶対年代の推定を行いつつある。この調査とは別に、ミャンマー国中央部で中期始新世末期のボンダウ層から初期真猿類の化石を多く発見することが出来た。5 属 6 種になることが確実となり、真猿類のアジア起源説を示唆する結果が得られた。

認知脳科学では 3 頭のチンパンジー幼児脳の形態発達を定期的に MRI により測定しておりヒトの場合と詳細な比較を行っている。また研究所に保存されている約 300 個体分のテナガザルからチンパンジーに至る類人猿 DNA の遺伝分析から、いわゆる色弱のチンパンジー 1 頭を発見し、網膜電図測定により赤緑色盲であることが明らかになった。現在色課題による行動実験の準備中であり、チンパンジーひいてはヒトの、色を手掛かりとする認知機能についての研究も可能となった。他方飼育下チンパンジーの認知機能研究では「概念」の獲得という観点での検査を継続した。チンパンジーは「花」という概念を持ち、見たことのない花を花であると認識することが可能であるが、刺激として写真の代わりに、正確に描写した絵、カット画、白黒の線画を用いたところ個体により成績が異なり、全てのチンパンジーがヒトが使用している絵画的表象を認識できるわけではないことが明かとなった。

分子遺伝では、ウガンダのカリンズ国のチンパンジー、ザイール国カフジのゴリラ、ガボン国ムカラバのゴリラとチンパンジーさらにタンザニア国タンガニーカ湖東側のチンパンジー分布域東端および南限等において糞、尿、体毛等の試料を収集し、地域遺伝分化、血縁判定等の遺伝分析を鋭意進めている。

(文責：竹中 修)

2. COE 国際シンポジウム及びその他の学術集会

人類学連携シンポジウム「暴力の進化史」

今年度は COE 形成基礎研究費の中間評価の際の人類学との連携という示唆を受け、「暴力の進化史」というテーマで文化人類学、霊長類学から以下に示すようなプログラムでシンポジウムの機会を持った。これは、COE ニュースレターの 2 号に報告したように近代、現代の人類史は戦争の歴史でもある。ある資料によると、16 世紀には戦争により世界で 160 万人が死亡したということである。それが 20 世紀には 1 億人を超える人が亡くなったとされている。ヒトの巨大化した脳のなせる技であろうか。

類人猿からヒトへの進化というスペクトラムの中で暴力の進化を考えなければと思い、類人猿における暴力、現代のヒトが抱える暴力について意見交換の場を持った。ゴリラにおける雌雄のきずなと子殺し、ネアンデルタール人類の暴力、母の暴力・父の暴力、平等主義社会における暴力、その他種々の発表があり意見交換の場を持つことが出来た。なおより詳細は COE ニュースレター 4 号を参照されたい。

日 時： 2001 年 12 月 7 日 (金)

場 所： 京都大会館

司会：上原重男 (京大)

竹中 修 (京大)

「シンポジウムの目的とするところ」

山極寿一 (京大)

「雌雄のきずなと子殺し：ゴリラの社会構造の可塑性をめぐって」

五百部裕 (相山女学園大)

「ピグミーチンパンジーの暴力と攻撃性」

保坂和彦 (京大)

「チンパンジーにおける暴力と平和」

討論 「類人猿における暴力とは」

司会：三上章允 (京大)

村山 (井上) 美穂 (岐阜大)

「脳内神経伝達物質関連遺伝子多型と攻撃性」

奈良貴史 (東北大・医・解剖)

「ネアンデルタールの暴力：生と死」

司会：足立 明 (京大)

菅原和孝 (京大)

「平等主義社会における暴力：ハームレス・ピープルの神話」

田中雅一（京都大）

「母の暴力・父の暴力」

宇田川妙子（金沢大）

「ジェンダー/セクシャリティから見る暴力」

総合討論 山極寿一・菅原和孝・田中雅一

ディスカッサント 加納隆至・青木恵理子（龍谷大）・

栗本英世（大阪大）

オーガナイザー 菅原和孝・山極寿一・竹中 修

協賛 京都人類学研究会（秋の季節例会）

（文責：竹中 修）

第4回サガ・シンポジウム「進化の隣人たち」

The 4th International SAGA symposium

標記の国際シンポジウムが、2001年11月15～17日、岡山国際交流センターで開催された。2001年林原フォーラムと冠して林原共済会が共催し、京都大学霊長類研究所（COE 拠点形成プログラム）が協賛した。主催団体のサガ（SAGA）は「アフリカ・アジアの大型類人猿を支援する集い」の英文略称である。今回のシンポジウムの詳細の記録ならびにサガの設立趣旨は、以下のサイトに詳述されている。参照されたい。<http://www.saga-jp.org/>

このシンポジウムの目的は、「大型類人猿の科学的理解を深め、野生生物の保護と飼育下におかれている大型類人猿の福祉を促進させる」ことにある。

チンパンジー（およびボノボ）、ゴリラ、オランウータンの3属4種に分類される大型類人猿は、CITES（サイティース、通称ワシントン条約）において、「絶滅の危機に瀕した種」として分類されている。野生の大型類人猿の生態について、日本をはじめ世界の研究者がこれまで研究を続けてきた。かれらがすみかとする熱帯林の減少、部分的な地域での生息数調査の結果から、野生個体数は近年急速に減少していると推測されている。一方、飼育下での研究もおこなわれてきた。2001年12月末現在、日本には、チンパンジー371個体がいる。その約2/3は動物園で飼育されており、約100個体が製薬会社にいる。ゴリラは31個体（12の動物園に分散）、オランウータンは53個体（26の動物園に分散）いて、この2種はすべて動物園で飼育されている。

サガでは、その設立以来、以下のような3つの提言を推進してきた。

- 1) 野生の大型類人猿とその生息域を保全する。
- 2) 飼育下の大型類人猿の「生活の質（QOL）」を向

上させる。

- 3) 大型類人猿を侵襲的な研究の対象にせず、非侵襲的な方法によって人間理解を深める研究を推進する。

サガの集いは1998年以来毎年1回この時期におこなわれてきた。今回が第4回目のシンポジウムとなる。例年同様、ジェーン・グドールさんによる講演会があった。そのほかの外国人招待参加者は以下のとおりだった。ロバート・シューメーカー、スミソニアン動物園（米）、類人猿飼育施設に斬新的なアイデアを取り入れた展示を実践をしている。ウィリアム・マックグルー、マイアミ大学（米）、野生チンパンジーの文化の研究で知られる。リンダ・マーチャント、マイアミ大学（米）、夫であるマックグルーと共にアフリカで野生チンパンジーの行動の調査をおこなっている。マイケル・トマセロ、マックスプランク進化人類学研究所（独）、ヨーロッパ最大の進化人類学・霊長類学の研究所に所属し大型類人猿の知性に関する研究をおこなっている。エリザベス・ウィリアムソン、（財）ダイアン・フォッシー・ゴリラ基金、カリソケ研究所所長（ルワンダ）、マウンテンゴリラの生態、行動、社会に関する研究と、保護活動をおこなっている。西原智明、WCS（ワイルドライフ・コンサベーション・ソサイエティ、（コンゴ）、コンゴやガボン等で西ローランドゴリラの研究および自然保護活動を実践している。

上記の6名の招待者のほかに、外国人の若手研究者を10名公募によって選んで招待した。氏名と研究テーマは以下のとおりである。タマール・ロン（アンゴラ）、野生ゴリラの保護。ジル・プリュッツ（米）、野生チンパンジーの生態。リザ・モスコビッチ（米）、野生チンパンジーの生態。ケイ・ファーマー（英）、野生チンパンジーの生態。タチアナ・ハムル（英）ギニアの野生チンパンジーの比較文化。タラ・ストインスキー（米）、飼育ゴリラの行動。ベルンハルト・ベルクル（オーストリア）、飼育チンパンジーと飼育マーモセットの行動。エマニュエル・グルントマン（仏）、野生オランウータンの行動。マウラ・チェリ（日本・ブラジル）、飼育チンパンジーの環境エンリッチメント。ドラ・ピロ（英）、野生チンパンジーの道具使用。

日本人の主な参加者は、加納隆至（京都大名誉教授）、長谷川寿一（東京大）、西田利貞、上原重男、松沢哲郎、山極寿一、濱田穰、友永雅己、上野吉一、山越言、マイケル・ハフマン（以上、京都大）、伊谷原一（林原自然科学博物館）、高崎浩幸（岡山理科大）、五百部裕（椋山女学園大）、古市剛史（明治学院大）、吉原耕一郎（東京多摩動物公園）、黒鳥英俊（東京葛西水族館）、中村美知夫（日本モンキーセンター）、他だった。

上記の人々による口頭発表に加えて、全部で72題のポスター発表があった。また多数の動物園関係者の参加を得て、広範な議論を展開することができた。

今回、岡山で開催された理由のひとつは、岡山市に本拠を置く林原自然科学博物館が「類人猿研究センター(略称 GARI: Great Apes Research Institute)」を2001年夏に開所したことにある。現在、子どもチンパンジー5個体が、約1万平米を有する敷地に暮らしている。チンパンジーの認知や行動について、観察や実験が進行中である。施設の概要は、次のサイトで検索できる。
http://www.hayashibara.co.jp/contents_chin.html

なお次回の「サガ5」は2002年11月14-17日に、京都大学霊長類研究所のCOEプログラムと共催で、犬山で開催が予定されている。

(文責: 松沢哲郎)

COE 国内シンポジウム

「ホミノイドの進化とその背景」

日 時: 2001年12月8日(土)~9日(日)

場 所: 霊長類研究所大会議室

参加者: 約30名

プログラム 2001年12月8日(土)

國松 豊(京都大・霊長研)

「タイとその周辺地域の類人猿化石」

仲谷英夫(香川大・工)

「タイ北部中新世哺乳類動物群の比較とその地質年代」

矢部 淳(福井県立恐竜博物館)

「タイ北部および周辺地域の第三紀植物化石群集と古環境」

長岡信治(長崎大・教育)

「東南アジアにおける新第三紀の層序とテクトニクス」

菅沼悠介(都立大・理)

「タイ北部 Chiang Muan に分布する中新統堆積岩の古地磁気学的研究」

竹中 修(京都大・霊長研)

「遺伝子からみたアジアのホミノイドの進化」

特別講演

Brigitte Senut (Museum National d'Histoire Naturelle, France)

「Orrorin: 600 万年前の初期人類」

2001年12月9日(日)

中務真人(京都大・理)

「類人猿のぶらさがり型適応は多元的か？」

荻原直道(京都大・理)

「直立姿勢維持のメカニズム: サル型立位とヒト型立位の EMG 分析」

巻島美幸(京都大・理)

「古植生からみたアフリカ後期新生代の古環境」

沢田順弘(島根大・総合理工)

「ケニア・リフトにおける後期新生代の大規模な構造運動・火山活動と生物圏へ及ぼす影響」

古市剛史(明治学院大・国際)

「ヒト上科の社会構造の進化-生態学, 形質人類学, 古地理学から何がわかるか-」

総合討論

(世話人: 國松 豊)

(文責: 國松 豊)

COE 国際シンポジウム

「長期野外研究の過去, 現在, 未来」

COE International Symposium "Research on long-lived animals: the past, present and future of longitudinal studies"

日 時: 2002年1月15日(火)~18日(金)

場 所: 愛知県犬山市・犬山国際観光センター
「フロイデ」

参加者: 約120名

プログラム 2002年1月15日(火)

Opening remarks: S. Uehara (Kyoto Univ.)

Welcome address: Y. Ishida (Mayor of Inuyama)

Plenary lecture

Chair: M. A. Huffman (Kyoto Univ.)

J. A. R. A. M. van Hooff (Prof. Emeritus, Univ. Utrecht)

"Alternative strategic trajectories in primates: Views from a long-term study of bimaturism in the orangutan"

2002年1月16日(水)

Session 1: Socioecology I,

Chair: M. A. Huffman (Kyoto Univ.) & W. P. J. Dittus (Primate Biol. Progr., Inst. Fundamental Study)

W. P. J. Dittus (Primate Biol. Progr., Inst. Fundamental Study)

"Social evolution of toque macaques in Sri Lanka"

A. Mori (Kyoto Univ.) "Life history of Japanese macaques living on the Koshima islet"

M. G. L. Mills (South Afr. Natl. Parks) "Long term field studies of large carnivores in South Africa"

Session 2: Multidisciplinary Study

Chair: S. K. Wasser (Univ. Washington) & S. Uehara (Kyoto Univ.)

- L. Pintea (Univ. Minnesota) "Integrating geospatial tools in long-term chimpanzee research and conservation: Lessons from Gombe"
- C. Hashimoto & O. Takenaka (Kyoto Univ.) "DNA analysis of wild bonobos (*Pan paniscus*) using noninvasive techniques at Wamba, DR Congo"
- S. K. Wasser (Univ. Washington) "Noninvasive genetic and endocrine methods for use in long-term monitoring programs of difficult to observe species"
- T. Oka (Forestry & Forest Prod. Research Inst.) "Wild gibbons' parentage tested by non-invasive DNA sampling and PCR-amplified polymorphic microsatellites"

Poster Session & Video

2002 年 1 月 17 日 (木)

Session 3: Demography & Population I

Chair: L. A. Isbell (Univ. California, Davis) & H. Ohsawa (Kyoto Univ.)

- L. A. Isbell & T. P. Young (Univ. California, Davis) "Extraordinary demography and life history in patas monkeys (*Erythrocebus patas*)"
- N. Nakagawa (Kobe City Coll. Nursing), H. Ohsawa (Kyoto Univ.) & Y. Muroyama (Kyoto Univ.) "Population and social dynamics of patas monkeys in Kala Maloue National Park, northern Cameroon"
- M. Cords (Columbia Univ.) "Long-term studies of blue monkeys in the Kakamega Forest, Kenya"

Session 4: Demography & Population II

Chair: A. E. Pusey (Univ. Minnesota) & M. A. Huffman (Kyoto Univ.)

- A. E. Pusey (Univ. Minnesota) "Why do male chimpanzees defend territories?"
 - J. H. Li & H. B. Ying (Anhui Univ.) "A long-term field study of the behavioral ecology of Tibetan macaques at Huangshan, China"
 - C. Saito (Miyagi Univ. Educ.), H. Sugiura (Kyoto Univ.) & K. Izawa (Miyagi Univ. Educ.) "Long-term research on the Japanese macaques of Kinkazan island: Results and topics"
- Chair: A. Jolly (Univ. Sussex) & A. Mori (Kyoto Univ.)
- H. Kurita (Oita City Gen. Planning Div.), Y. Sugiyama (Tokai-Gakuen Univ.) & H. Ohsawa (Kyoto Univ.) "A half century's summary of a provisioned Japanese macaque population at Takasakyama and its management"
 - S. Takatsuki (The Univ. Tokyo), M. Minami, N. Onishi (Hoshino Wildlife Research Center) & T. Ito (The Univ. Tokyo) "Dynamics of a sika deer (*Cervus nippon*)

population and vegetation on an island in northern Japan"

2002 年 1 月 18 日 (金)

Session 5: Socioecology II

Chair: K. B. Strier (Univ. Wisconsin at Madison) & Y. Muroyama (Kyoto Univ.)

- A. Nishimura (Doshisha Univ.) "Life and sex in wild female woolly monkeys"
- S. Boinski (Univ. Florida at Gainesville) "The risk of predation by raptors for squirrel monkeys: A dynamic perspective afforded by three long-term field studies"

Session 6: Conservation & Management

Chair: S. Boinski (Univ. Florida at Gainesville) & K. Watanabe (Kyoto Univ.)

- K. B. Strier (Univ. Wisconsin at Madison) "Balancing research and conservation agendas: Perspectives from two decades with muriquis"
 - D. A. Collins (Gombe Stream Research Centre) "Baboons, life histories and human influence at Gombe"
 - T. Mano (Hokkaido Inst. Environmental Sci.) "Long term monitoring of brown bears on Hokkaido: From a small site to the whole island"
- Chair: D. A. Collins (Gombe Stream Research Centre) & M. A. Huffman (Kyoto Univ.)
- A. Jolly (Univ. Sussex) "Berenty *Lemur catta* over the long term"
 - J. Yamagiwa (Kyoto Univ.), A. K. Basabose (Centre de Recherche en Sci. Naturelles) & J. Kahekwa (Inst. Congolais pour Conservation de la Nature) "Importance of long-term studies on eastern lowland gorillas in the Kahuzi-Biega National Park, Democratic Republic of Congo"
 - T. Nishida (Kyoto Univ.) "The chimpanzees of Mahale: Current status of conservation and research"

本国際シンポジウムの企画は、上原重男, M. A. Huffman, 大沢秀行, 杉浦秀樹, 室山泰之, 森明雄, 渡辺邦夫, 松村秀一がおこなった。実際の準備と運営においては、研究員や研修員、院生、事務担当者ほか霊長類研究所に所属する多くの方々の協力を得た。

講演者には外国から 13 名、国内から 12 名を招待し、全部で 6 セッション、計 24 題の話題が提供された。ほかにポスター発表 22 件とビデオ上映があり、参加者は合計約 120 名であった。

企画者は、野外における長期研究がこれまでにもたらした成果を一堂に集めてさまざまな角度から検討し、将来へ向けての新しい可能性を探るために、二つの大きな柱を考えて参加を呼びかけた。第一の柱は、生態学や行動学のさまざまなトピックについてどのような貢献を

長期研究が果たしてきたのか、それぞれの調査地の歴史にもとづく独自性はどのような独創的な研究成果を生み出したのか、であった。第二の柱は、長期研究にともなう研究活動や調査地の運営管理、あるいは調査地の保全や調査対象の保護の問題を論議することであった。これらの問題提起は十分に報われたといえてよい。

特別講演では長期研究によってはじめて明らかになったオランウータンの雄のバイ・マチュアリズムとそれにもとづく繁殖戦略がレビューされた。第一セッションではマカクと南アフリカの食肉目を、第五セッションでは新世界ザルを対象とした社会生態学的調査の成果が発表された。第二セッションでは、野外調査に衛星画像を導入したり分子生物学的手法を応用すると、現地滞在時間や直接観察時間を超越して連続的なモニタリングが可能になる実例が示された。第三・四セッションでは旧大陸の霊長類やニホンジカを対象とした個体群動態が、生息環境の長期的変化との関連で紹介された。第六セッションには保護と管理に関わる演題が集められ、霊長類あるいはニホンヒグマをめぐる人間との直接・間接の葛藤・調和が、調査地域の特性とともに論議された。

招待講演者全員がシンポジウムの趣旨をよく理解して発表の準備をしてくれたので、終始活発な討論がおこなわれた。講演会場にはいつも約70名を越える着席者がいた。ある招待講演者は、自分の研究とは直接関係のない演題であっても席を立つ気にはならなかったと述べていた。参加者からはこのような非常に高い評価を受け、実りあるシンポジウムとなった。準備・運営に関わった方々、ならびに参加していただいた皆様に心から感謝する。

なお、*Science* 東京支局の Dennis Normile 氏が本シンポジウムを傍聴・取材した紹介記事 *Homeland defense in the wild* が、2月8日号に掲載された (Vol. 295: 957-959)。

(文責：上原重男)

COE 研究「人猿の進化と人類の成立」

成果報告会 2002

COE 形成基礎研究費が立ち上がり平成13年度は4年目となった。研究の進捗状況は別項に記載したが、今年度コンパクトにまとまっている研究成果の報告会を以下のプログラムで行った。より詳細な内容は COE ニュースレター第4号を参照されたい。

日 時：2002年3月6日 (水)

場 所：京都大学霊長類研究所大会議室

竹中 修 (京都大・霊長研)

「研究計画の進捗状況と将来展望」

座馬耕一郎 (京都大・理)

「マハレ山塊国立公園の野生チンパンジー・毛づくいの手の使い方」

下岡ゆき子 (京都大・霊長研)

「クモザルの離合集散社会-チンパンジーとの比較」

萩原直道 (京都大・理)

「類人猿型屈曲立位の姿勢制御統制」

茶谷 薫 (京都大・霊長研)

「チンパンジー幼児の運動発達」

国松 豊 (京都大・霊長研)

「タイにおける類人猿化石調査」

打越万喜子 (京都大・霊長研)

「テナガザル・アカン ボウの認知行動発達」

田中正之 (京都大・霊長研)

「チンパンジーの線画の認識」

三上章允 (京都大・霊長研)

「色弱チンパンジーの色覚 (網膜電図)」

清水慶子 (京都大・霊長研)

「非侵襲的試料による類人猿の内分泌動態」

尾田真子 (総合研究大学院大)

「ホミノイドにおける尿酸代謝関連遺伝子の進化」

総合討論 類人猿研究の現状と将来への展望

ディスカッサント：西田利貞・古市剛史・茂原信生・

三上章允・竹中 修

(文責：竹中 修)

3. COE 外国人研究員

氏 名：李保国 (中華人民共和国、西北大学生物学部)

受入教官：渡邊邦夫

研究課題：中国産霊長類特に金絲猴とニホンザルおよび
東南アジア産リーフモンキーとの比較研究

招へい期間：2001年6月20日～2002年3月31日

氏 名：Vu The Long (ベトナム社会主義共和国・ベトナム国立社会学・人文科学センター人類・古環境学部)

受入教官：茂原信生

研究課題：ベトナムにおける動物層の変遷とアジア他地域との関係の研究

招へい期間：2001年7月1日～2001年10月31日

氏 名：Massimo Bardi (イタリア共和国、ピサ大)

受入教官：大澤秀行

研究課題：霊長類の社会学

招へい期間：2001年5月1日～2002年3月31日

4. COE 非常勤研究員

(氏名：採用期間)

井上 雅仁：2001年4月1日～2002年3月31日
江木 直子：2001年4月1日～2002年3月31日
保坂 和彦：2001年4月1日～2002年3月31日
山根 明弘：2001年4月1日～2002年3月31日
成田 裕一：2001年4月1日～2001年9月30日
泉 明宏：2001年10月1日～2002年3月31日

5. COE 研究支援推進員

(氏名：採用期間)

梅田せつ子：2001年4月1日～2002年3月31日
小笠原麻美：2001年4月1日～2002年3月31日
岡田 真紀：2001年4月1日～2002年3月31日
片岡 敦子：2001年4月1日～2002年3月31日
鈴木賀寿子：2001年4月1日～2002年3月31日
中野千枝子：2001年4月1日～2002年3月31日
葉栗 和枝：2001年4月1日～2002年3月31日
福富 憲司：2001年4月1日～2002年3月31日
梅田 恵子：2001年11月1日～2002年3月31日
佐藤 慎祐：2001年11月1日～2002年3月31日
鈴木 益廣：2001年11月1日～2002年3月31日
加藤みどり：2001年11月1日～2002年3月31日
堀尾由紀子：2001年11月1日～2002年3月31日
大平(落合)知美：2001年11月12日～2002年3月31日

VI 共同利用研究

1. 概要

昭和57年以来、研究課題として「計画研究」並びに「自由研究」を併置し、昭和62年度には「資料提供」を設置した。さらに平成6年度から「所外供給」を新たに設置し、これらに係る共同利用研究が実施されている。

「計画研究」とは、本研究所内推進者の企画に基づいて共同利用研究者を公募するもので、個々の「計画研究」は3～5年の期間内に終了し、まとめた成果を公表する。

「自由研究」とは「計画研究」に該当しないプロジェクトで、応募者の自由な着想と計画に基づき所内対応者の協力を得て、継続期間3年を目処に研究が実施されている。

「資料提供」とは、資料（体液、臓器、筋肉、毛皮、歯牙・骨格、排泄物等）のみを提供する共同研究として実施されている。

「所外供給」とは、本研究所以外の研究機関で行うことがより適切な研究のために、生体のサルを所外に供給するものである。

平成13年度の計画課題、応募並びに採択状況、研究会等の概略は以下のとおりである。

(1) 計画研究

平成13年度実施の計画研究は以下の8課題である。

(実施予定年度：課題推進者、下線は代表者)

1. 生体分子の構造解析による霊長類の系統進化

(平成11年度～13年度：竹中 修・景山 節・庄武孝義)

遺伝様式を異にする核、ミトコンドリア、Y染色体上DNAの微小変化やダイナミックな変化あるいはcDNA分析や微量タンパク質の高感度分析等生体分子の構造解析により霊長類の系統進化を明らかにする。

2. サルにおける環境化学物質の蓄積と分子的生理的応答の研究

(平成11年度～13年度：浅岡一雄・景山 節・鈴木樹理)

内分泌攪乱物質など、特定の化学物質を対象として、各地のサルとその生育環境に広まる蓄積量を調査研究する。サルの応答を酵素、レセプター、ホルモン調節、感覚や生殖などから分子的生理的に研究する。関連する評価測定法の開発や年齢や人を含む霊長類間の比較研究を進める。

3. 比較による霊長類の解剖学的研究

(平成11年度～13年度：茂原信生・毛利俊雄)

ものごとを理解したり、説明したりするためには比較はもっとも有力な手段のひとつである。霊長類の解剖学的特徴の記載においても、人体解剖用語を使用するこ